

エレン・ケイ

『児童の世紀』を読む

— 未来への意志を育てること —

津守 真

あと数年で二十世紀は終わろうとしている。

今世紀のはじめ、スウェーデンの教育者であり、女性解放運動家であったエレン・ケイは、『児童の世紀』という表題の書物を著し、それは忽ち数か国に翻訳された。日本でも大正のはじめに翻訳されている。

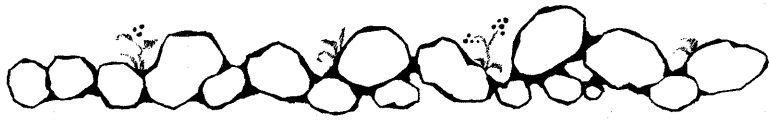
私自身、二十世紀前半に生まれて、子ども時代を過ごし、二十世紀後半に子どもの研究を専門として仕事をしてきた。私共の社会は、その前半に第二次世界大戦・敗戦



という大きな転換期があったが、後半は平和を享受した。その中に身をおいて子ども
の仕事をしてきた私は、子どもにとっては決して幸せとは言えない時代だったと
考えている。むしろ子どものことを専門とする故に厳しく見えてきたことがいくつも
あった。科学を根拠にして子どもの遊びは侵害され、子どもの住環境、遊び場の自然
は破壊され、遊ぶ時間は減少した。それは一九六〇年代にはじまった。そして最近
は子どもの自殺にまで至るいたましい事実がひろがっている。世界に目を向けると、い
まだに子どもが戦争、貧困の犠牲者である。二十世紀は「児童の世紀」どころではな
い。世界史の中でもこれほどにひろく子どもが人為的な理由で苦しんだ時代は少な
かったのではないか。そういう時代だからこそか、「子どもの権利条約」は世界の
国々に公的に承認され、O M E P 世界大会にも見られたように、こどもの側に立つて
仕事をし、主張する人々が数多くいるのも世界的事実である。

エレン・ケイは「児童の世紀」と言って何を主張したのか。この児童の世紀の終わ
りにあたって、もう一度これを読み直してみることが意義あることと思う。

その冒頭に彼女は「未来への意志」の力が子どもの中の本性の中に隠されており、子ど
ものあらゆるいたずらには善を生み出す、こわれることのない種が含まれていると述
べて、ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』から引用する。



「あなたがたがこの小さきもののひとりのようにならなければ、と人類の師（イエス）は言われた。われわれと対等の人間を、われわれは自分たちを手本にして形作りと考へ、思うままに教育訓練の対象（subject）として扱っている。彼らは自分自身の意志をもたないのか。それならば我々も自分の意志をもたないのか。大人のすぐれている点は何なのか。われわれが年長であり経験を多く持っている事実なのか。ああ、天の神は年長者も幼い者も等しく見給い、幼い者をより多く喜ばれる。イエスは何世紀も前にそう言われた。しかし、人々は神を信じると口で言いながら、神に聞くとしない。これは昔からのトラブルのもとだった。彼らは子どもたちを自分と同じ形に型どろうとす」と。

未来を創りだそうとする意志を子どもの中に育てることは、エレン・ケイが繰り返し述べるテーマである。私はこれを読んで、いまま私共は同じ課題を背負っていることを思った。未来を作ることは自分とは関係がないと考えるから子どもが自殺するのだらう。幼い子どもにとっての未来は、時間的には一日の中のことである。遊びは一瞬先の未来を自分の意志で創り出す行為である。遊ぶ時間のない現代の子どもたちは、彼女の言う「未来への意志」を失っているのではないか。二十世紀の初めに主張されたことは、現代も一層課題であり続けている。

他方、私の周囲の多くの若者たちが、この時代にも自分の未来を望み見て生きているのも事実である。「児童の世紀」の気運は、二十世紀前半の新教育運動を生み出



し、既に壮年から老年のかなりの人々がその影響を受けて若い時代を過ごした。そしてその影響力は広い範囲で私共の時代に引き継がれた。私がかかわってきた保育の実践の場も、その一環である。

しかしエレン・ケイも言うように、美しく進歩的な言葉が語られても実際は古いままである。その点も二十世紀初めと終わりとは変わらない。

彼女は言う。「彼らは、進化、個性、自然の傾向を口にする。しかし、自分が信じていると言う新しい教えを真剣に考えない。悪は悪によって駆逐されねばならないと考える。」

エレン・ケイはさらに次のように述べる。これを読むと全く新鮮で、いまに通用する言説が多い。しばらく彼女の説くところに耳を傾けてみよう。

「新しい教育は、自然が静かにゆっくりと働くことを助ける。」

新しい教育は、子どもを取り巻く環境条件が自然の業を助けるように注意を払う。

これが教育である。」

「子どもの真のパーソナリティを抑圧して、他のパーソナリティをもって代えることは、教育学的犯罪である。彼らは悪が善に変えられる可能性を信じていない。この段階に到達するときに教育は科学と芸術になり始める。」

「魂の本性を破壊することはできない。ここに二つの可能性がある。服従させるか、



より高い次元に高めるか。」

「子どもと遊ぶことのできる人のみが子どもを教育することができる。その訓練の第一条件は、子ども自身になることである。それは子どもっぽくなることではない。それは子どもでも望まない。子どもが生きた活動に夢中になっているように、子どものところにまで引き上げられることである。子どもを全く自分と対等の者であると考え、大人に対すると同様の配慮と親切な信頼を寄せることである。大人が望むように子どもに影響を与えるのではなく、子ども自身があるままの印象によって大人が影響されること、子どもを欺瞞と強制によって扱うのではなく、誠実さとまじめさをもって接することである。」

エレン・ケイの言う「未来への意志」は、理念や理想ではなく、子どもの現実をみる者の主張である。彼女は世紀の終わりを見ていないのであるが、それは時代を超えて通用することを心の底で信じていたのではなからうか。現代の教育においても、個々の能力の養成よりも「未来への意志」を子どもの中に育てることこそが最優先の課題である。

(愛育養護学校)